

【 第140 聖詠 第4調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ、しゅ主  
主 我 聽 給 主

よなんぢによぶすみやかにわれにいたりたま給  
爾 呼 速 我 格 給

え、なんぢによぶときわがいのりのこえをい納  
爾 呼 時 我 禱 聲 納

れたまえ、しゅよわれにききたまえ  
給 主 我 聽 給

え、ねがわくはわがいのりはこうろの  
願 我 禱 香 爐

かおりのごとく、なんぢがかんばせのまえに  
香 如 爾 顔 前

のぼり、わがてをあぐるはくれのまつ  
登 我 手 舉 暮 祭

りのごとくいれられん。しゅよわれにききた給  
如 納 主 我 聽 給

まえ。

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ  
主よ、我が口に 衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾

きて、ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら あまみ な  
きて、不法を 行う人と共に、罪の推諉せしむる 母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ あぶら わ  
ざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と 美しき膏、我

こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお  
が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石  
あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ぢごく  
の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の  
くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ  
口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退く  
なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ  
る母れ。我が爲に設けられし弼、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に  
かか ただわれ す え  
罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を  
そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路に於て、  
かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は私の  
かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば  
われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

⑥ しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ  
主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾  
まえ つつし ため  
の前に敬まん爲なり。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ  
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以て

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おろ たま  
吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

⑤ われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

いま よ い とき いま すくい ひ ひとりじんあい しゅ なんぢ おお じんじ もつ  
今は嘉く納るべき時、今は救の日なり、獨仁愛なる主よ、爾の多くの仁慈を以て

わ たましい のぞ わ ふほう おもに おろ たま  
吾が靈に臨みて、我が不法の重任を卸し給え。

④ わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

じゅなんしゃ なんぢら おのれ ち ながれ もつ はなはだ ふけん ほのお け せかい しゅう  
受難者よ、爾等は己の血の流を以て甚しき不虔の焰を滅して、世界に衆の

ため けいけん こうみょう たら ちめいしゃ なんぢら きよめい しょしん そのあくしゅう まつり  
爲に敬虔の光明を照せり。致命者よ、爾等は虚名なる諸神と、其悪臭の祭祀と、

みや ことごと や ち あ もの ため いときよ ひかり かがや われらこれ たら む  
宮とを盡く焚きて、地に在る者の爲に最潔き光を輝かせり。我等之に照されて、無

しん やみ のが ぐうぞう まよい さ せかい おおい あわれみ たま ふくはい  
神の暗を脱れ、偶像の迷を避けて、世界に大なる憐を賜うハリストスに伏拜す。

ねが <sup>しゅ たの</sup> けだしあわれみ <sup>しゅ</sup> おおい <sup>あがない</sup> かれ <sup>かれ</sup>  
 ③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋 憐 は主にあり、大なる 贖 も彼にあり、彼  
 はイスライリを其 <sup>そのことごと</sup> 悉 <sup>ふほう</sup> くの不法より 贖 <sup>あがな</sup> わん。

<sup>しゅ</sup> なんぢ <sup>しよせいじん</sup> しん たて <sup>ぐそく</sup> <sup>じゅうじか</sup> しるし <sup>おのれ</sup> かた <sup>いさ</sup> <sup>おのれ</sup>  
 主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく己  
<sup>くるしみ</sup> わた <sup>あくま</sup> おごり <sup>いざない</sup> むな <sup>かれら</sup> きとう <sup>よ</sup> <sup>ぜんのう</sup> <sup>かみ</sup>  
 を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能の神と  
<sup>せかい</sup> <sup>へいあん</sup> われら <sup>たましい</sup> <sup>おおい</sup> <sup>あわれみ</sup> <sup>くだ</sup> <sup>たま</sup>  
 して、世界に平安、我等の靈に大なる 憐 を降し給え。

<sup>ばんみん</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>ほ</sup> <sup>あ</sup> <sup>ばんぞく</sup> <sup>かれ</sup> <sup>あが</sup> <sup>ほ</sup>  
 ②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

<sup>しゅ</sup> なんぢ <sup>しよせいじん</sup> しん たて <sup>ぐそく</sup> <sup>じゅうじか</sup> しるし <sup>おのれ</sup> かた <sup>いさ</sup> <sup>おのれ</sup>  
 主よ、爾の諸聖人は信の盾を具足し、十字架の記號にて己を堅め、勇ましく己  
<sup>くるしみ</sup> わた <sup>あくま</sup> おごり <sup>いざない</sup> むな <sup>かれら</sup> きとう <sup>よ</sup> <sup>ぜんのう</sup> <sup>かみ</sup>  
 を苦に付して、惡魔の驕慢と誘惑とを空しくせり。彼等の祈禱に由りて、全能の神と  
<sup>せかい</sup> <sup>へいあん</sup> われら <sup>たましい</sup> <sup>おおい</sup> <sup>あわれみ</sup> <sup>くだ</sup> <sup>たま</sup>  
 して、世界に平安、我等の靈に大なる 憐 を降し給え。

<sup>けだし</sup> <sup>かれ</sup> <sup>われら</sup> <sup>ほどこ</sup> <sup>あわれみ</sup> <sup>おおい</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>しんじつ</sup> <sup>なが</sup> <sup>そん</sup>  
 ①蓋彼が我等に施す 憐 は大なり、主の眞實は永く存す。

<sup>いた</sup> <sup>さんび</sup> <sup>ちめいしゃ</sup> <sup>なんぢら</sup> <sup>およそ</sup> <sup>ちじょう</sup> <sup>こと</sup> <sup>い</sup> <sup>いさ</sup> <sup>おのれ</sup>  
 至りて讚美たる致命者よ、爾等は凡の地上の事を意とせずして、勇ましく己を  
<sup>くるしみ</sup> わた <sup>のぞ</sup> <sup>ふく</sup> <sup>え</sup> <sup>てん</sup> <sup>くに</sup> <sup>つ</sup> <sup>もの</sup> <sup>な</sup> <sup>じんあい</sup> <sup>かみ</sup> <sup>まえ</sup> <sup>いさみ</sup> <sup>たも</sup>  
 苦に付し、望みし福を得て、天の國を嗣ぐ者と爲れり。仁愛なる神の前に勇敢を有ち  
<sup>せかい</sup> <sup>ため</sup> <sup>へいあん</sup> われら <sup>たましい</sup> <sup>ため</sup> <sup>おおい</sup> <sup>あわれみ</sup> <sup>もと</sup> <sup>たま</sup>  
 て、世界の爲に平安、我等の靈の爲に大なる 憐 を求め給え。

【 生神女讚詞 第5調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いま  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 も 一 つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
 何 時 世 世  
 むかしくれないのうみにてこんいんをしら  
 昔 紅 海 婚 姻 知  
 ざるよめのかたちしるされたり。かしこ  
 聘 女 象 記 彼 處  
 にはモイセイみづをわかつもの、ここには  
 水 分 者 此 處

ガヴリイル き せ き に つ と む る も の な り 。 か の  
 奇 迹 務 者 彼

と き イズライリ は あ し を ぬ ら さ ず し て ふ か み を あ 歩  
 時 足 濡 深 處 歩

ゆ み 、 い ま ど う て い ぢ ゃ は た ね な く し て  
 今 童 貞 女 種

ハリストス を う め り 。 う み は イズライリの わ た 渉  
 生 海 渉

り し の ち も と の ま ま と お ら れ ず 、 き ず な  
 後 元 過 瑕

き も の は エムマヌイル を う み し の ち も と の ま ま き ず  
 者 生 後 元 瑕

な し 。 え い え ん に し て い と え い え ん な る も 者  
 永 遠 最 永 遠 者

の ひ と と な り て あ ら わ れ し か み よ 、 わ  
 人 現 神 我

れ ら を あ わ れ み た ま え 。  
 等 憐 給

【 聖入 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、<sup>つつし</sup> 肅 <sup>た</sup> みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せ い に し て ふ く た る じ ょ う せ い な る て ん の ち ち の  
 聖 福 常 生 天 父

せ い なる こう え い の お だ や か なる ひ か り イ イ  
 聖 光 榮 穩 光  
 ス スハリスト スよ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
 我 等 日 入 至 暮  
 れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 を う た う 。 い の ち を た も う か み の こ  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ 、 なん ぢ は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 る べ し 、 ゆ え に せ か い は なん ぢ を あ が め  
 故 世 界 爾 崇  
 ほ む 。  
 讚

【 第一の提綱 プロキメン 】

司祭) つつし き 謹みて聴くべし、しゅうじん へいあん えいち つつし き 衆人に平安、睿智、謹みて聴くべし。

誦經) だいし しらべ ねが なんぢ じれん なんぢ しんじつ つね われ まも プロキメン、第四の調、願わくは爾の慈憐と爾の眞實とは常に我を護らん、

ね が わ く は なん ぢ の じ れ ん と な なん ぢ の し ん じ つ と  
 願 爾 慈 憐 爾 眞 實  
 は つ ね に わ れ を ま も ら ん 。  
 常 我 護

誦經) われせつ しゅ たの かれわれ かたぶ たま 我切に主を待みしに、彼我に傾き給えり、

ね が わ く は なん ぢ の じ れ ん と な なん ぢ の し ん じ つ と  
 願 爾 慈 憐 爾 眞 實



誦經) <sup>ねが なんぢ じれん なんぢ しんじつ</sup> 願わくは爾の慈憐と爾の眞實とは、



司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>そうせいき よみ</sup> 創世記の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 創世記 5章30節~6章8節 】

誦經) <sup>としごひやく さんし う これ ひと はじ ちじょう はん</sup> ノイは年五百にして三子を生めり、シム、ハム、イアフエト是なり。人始めて地上に繁  
<sup>しよく ぢよし かれら うま かみ しよし ひと ぢよし うるわ み そのおよ える</sup> 殖して、女子も彼等に生れたれば、神の諸子は人の女子の美しきを見て、其凡そ選  
<sup>もの つま な しゆかみい わ しん なが こ ひとびと うち お かれらにく</sup> べる者を妻と爲せり。主神曰えり、我が神は永く此の人人の中に居らざらん、彼等肉な  
<sup>ただかれら ひ ひやくにじゅうねん かのときち いじょうふ そののちかみ しょ</sup> ればなり、惟彼等の日は百二十年なるべし。當時地に偉丈夫ありき、其後神の諸  
<sup>し ひと ぢよし い こう これら またいじょうふ いにしえ な ひと</sup> 子は人の女子に入りて子を生子しが、此等も亦偉丈夫にして、古昔の名聲ある人なりき。  
<sup>しゆかみ ひと あく ち み かくじんひび そのころ ただあ はか み こ おい</sup> 主神は、人の惡の地に盈ち、各人日日に其心に惟慝しきことを圖るを見たり、是に於  
<sup>かみ ちじょう ひと つく く そのころ うれ かみい わ つく ひと</sup> て神は地上に人を造りしことを悔いて、其心に憂いたり。神曰えり、我が造りし人を  
<sup>われち おもて ほろぼ ひと かちく はうもの そら とり およ われかれら つく</sup> 我地の面より滅し、人より家畜、昆虫、天空の鳥に及ばん、我彼等を造りしことを  
<sup>く ただ しゆかみ まえ めぐみ え</sup> 悔ゆればなり。惟ノイは主神の前に恩を獲たり。

【 第二の提綱 <sup>プロキメン</sup> 】

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

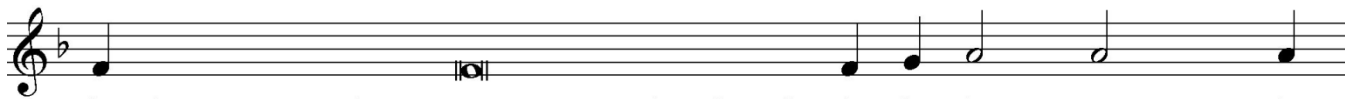
誦經) <sup>だいろく しらべ われい しゆ われ あわれ わ たましい いや たま</sup> プロキメン、第六の調、我言えり、主よ、われを憐み、我が靈を愈し給え、





が た ま し い を い や し た ま え 。  
 靈 愈 給

誦經) まづ <sup>もの</sup>とぼ <sup>もの</sup>かえり <sup>ひと</sup>さいわい  
 貧しき者 乏しき者を 顧みる人は 福なり、



われ い え り、しゅよ、われを あわれ み、われ  
 我 言 主 我 憐 我



が た ま し い を い や し た ま え 。  
 靈 愈 給

誦經) われい <sup>しゅ</sup>われ <sup>あわれ</sup>  
 我言えり、主よ、我を 憐み、



わ が た ま し い を い や し た ま え 。  
 我 靈 愈 給

【 祝福 】

司祭) えいち <sup>つつし</sup> <sup>た</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>しゅうじん</sup> <sup>てら</sup>  
 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) しんげん <sup>よみ</sup>  
 箴言の讀、

司祭) つつし <sup>き</sup>  
 謹みて聴くべし、

【 箴言 6章20～7章1節 】

誦經) わ <sup>こ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ちち</sup> <sup>ほう</sup> <sup>まも</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>はは</sup> <sup>いましめ</sup> <sup>す</sup> <sup>なか</sup> <sup>つね</sup> <sup>これ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>こころ</sup>  
 我が子よ、爾の父の法を守れ、爾の母の誠を棄つる母れ、常に之を爾の心

に結び、之を爾の項に佩びよ、是は爾の行く時に爾を導き、寝ぬる時に爾を守

り、寤むる時に爾と語らん。蓋 <sup>さ</sup> <sup>とき</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>かた</sup> <sup>けだしい</sup> <sup>いましめ</sup> <sup>ともしび</sup> <sup>おきて</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>おしえ</sup> <sup>せめ</sup> <sup>いのち</sup>  
 り、寤むる時に爾と語らん。蓋 誠は燈なり、法は光なり、教訓の譴は生命の

みち <sup>なんぢ</sup> <sup>あ</sup> <sup>おんな</sup> <sup>いんぶ</sup> <sup>した</sup> <sup>へつらい</sup> <sup>まも</sup> <sup>いた</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>こころ</sup> <sup>うち</sup> <sup>かれ</sup>  
 途なり、爾を悪しき婦より、淫婦の舌の詭媚より守るを致す。爾は心の中に彼

の <sup>うる</sup> <sup>わしき</sup> <sup>した</sup> <sup>なか</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>め</sup> <sup>よ</sup> <sup>とら</sup> <sup>なか</sup> <sup>かれ</sup> <sup>その</sup> <sup>まぶた</sup> <sup>もつ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>いざ</sup> <sup>な</sup>  
 の 美を戀う母れ、爾の目に因りて捕わるる母れ、彼は其瞼を以て爾を誘う

べからず、蓋 <sup>けだしい</sup> <sup>いんぶ</sup> <sup>ため</sup> <sup>ひと</sup> <sup>わづか</sup> <sup>パン</sup> <sup>ひと</sup> <sup>かけ</sup> <sup>いた</sup> <sup>かんぶ</sup> <sup>ひと</sup> <sup>たつと</sup> <sup>たましい</sup>  
 べからず、蓋 淫婦の爲に人は僅に餅の一角あるのみに至る、姦婦は人の貴き靈

を捕う。 <sup>とら</sup> <sup>ひと</sup> <sup>ひ</sup> <sup>ふ</sup> <sup>ところ</sup> <sup>お</sup> <sup>その</sup> <sup>ころ</sup> <sup>も</sup> <sup>や</sup> <sup>ひと</sup> <sup>や</sup> <sup>け</sup> <sup>ず</sup> <sup>み</sup> <sup>ふ</sup> <sup>その</sup> <sup>あし</sup> <sup>や</sup>  
 を捕う。人火を懐に置きて、其衣を焚かれざらんや、人藪炭を蹈みて、其足を焚か

れざらんや、 <sup>ひと</sup> <sup>その</sup> <sup>となり</sup> <sup>つま</sup> <sup>つ</sup> <sup>また</sup> <sup>か</sup> <sup>ごと</sup> <sup>これ</sup> <sup>さわ</sup> <sup>もの</sup> <sup>つみ</sup> <sup>ぬす</sup> <sup>もの</sup>  
 れざらんや、人其鄰の妻に就くも亦是くの如し、之に捫る者は罪なしとせず。竊む者

う <sup>その</sup> <sup>たましい</sup> <sup>あ</sup> <sup>ため</sup> <sup>ぬす</sup> <sup>ひと</sup> <sup>これ</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>も</sup> <sup>とら</sup> <sup>その</sup> <sup>しち</sup> <sup>ばい</sup> <sup>つぐ</sup> <sup>の</sup>  
 飢えて其靈を飽かせん爲に竊まば、人之を容さず、若し執えられば、其七倍を償

そのいえ しょゆう ことごと いた おんな かんいん おこな もの こ むち これ な もの  
い、其家の所有を 悉く出さん。婦と姦淫を行 う者は、是れ無知なり、之を爲す者  
おのれ たましい ほろぼ かれきず はづかしめ う そのはぢ つい そそ けだしねたみ  
は己の 靈を滅す。彼傷と 辱とを受けん、其耻は終に雪がれざらん、蓋 妒忌  
おつと いか むく ひ かれゆる いか あがない かえり おお おくりもの  
は夫を怒らしむ、報ゆる日には彼寛さず、如何なる 贖をも 顧みず、多くの 贈遺を  
な やわ わ こ わ ことば まも わ いましめ なんぢ ころお さ わ  
爲すとも柔らがざらん。我が子よ、我が言を守れ、我が 誠を爾の心に藏めよ。我が  
こ しゆ とうと しか けんご かれ ほか た もの おそ なか  
子よ、主を尊め、然らば堅固にならん、彼の外に他の者を畏るる母れ。

※ 願わくは我が禱は、、、へ